

梅北志多ノ





六万番歌合の時山歌といふ
 首成りたの之れ昭々たる
 誰のいふも言はずはるる
 例の他活き音もあつて
 昔は見ゆやうなりは
 けはるる又ありは
 信々判をいふ事
 事たるは
 今やあつた
 といふ力も
 といふ事
 といふ事
 といふ事
 判者の

柏蔵書
 121
 冊
 計



解心操りしつと頼速く
 句似し巧しと云ふは六六の
 佛陣に仇九世をなすよの
 人のしつと云ふはしつとに
 初陣の輩れよつたしと云
 上者よとの風韻なむ振る業さ
 する判の句しつと云ふは
 六六の句しつと云ふは
 祀しつと云ふはしつと云
 けしつと云ふはしつと云
 けしつと云ふはしつと云
 けしつと云ふはしつと云

ちつと云ふはしつと云
 けしつと云ふはしつと云

大黒菴
 井眉菴
 馬田江
 東籬園
 芦陰舎
 翁堂
 子日菴
 反古菴
 月夜菴
 汝星菴
 其日菴
 樗菴
 無為菴
 八千房
 清得舎
 二齋堂



一 囊軒
 五彩堂
 九夏菴
 花屋菴
 芙蓉菴
 九々菴
 五葉亭
 富雪菴
 淺生菴

芦九家

凡例

一 派速通付假借字通位居所爲
 氏菴号示姑らうなく記
 各撰卷はあまハ自筆と云
 一 世の通字は字書に自の
 かるをえうけて出

一 夏防落款と云は用らる
 模写

一 判者の中に好まき
 此のまきこの心ゆあると云つけ

一 尚時点の好士なるの
 鳥字ハ其のまき控写一朱青有

一 一年末のまき
 其の判者の賞券の川と再と

一 一書書の教諭と云の
 たりてえうけらるるまき
 とけり

一 夏防落款と云は用らる
 其の判者の賞券の川と再と
 たりてえうけらるるまき
 規矩

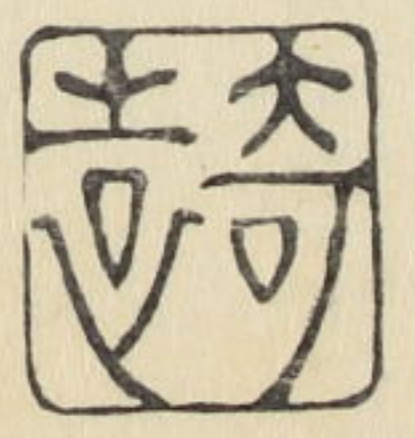
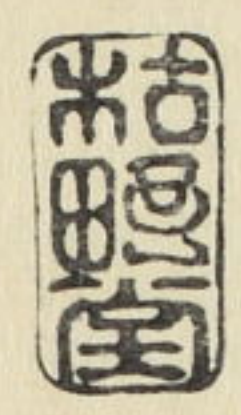
なんは...
大黒菴

大黒菴

菅 法橋
奇淵

大黒菴

大黒菴
大黒菴



羊羹の歯とあむ物やうあの花
水いんせうく出たけりあはる
秋の衣衣とよのあはる麻の殻
あはるあはるあはるあはる
右大黒庵宗函句

大黒菴点譜

白 朱 一、

白 青 三、

青 五、

青 十、

朱 八、

青 十三、

朱 十五、



白 青 二十、



青 廿五、



朱 五十、

大黒菴高判

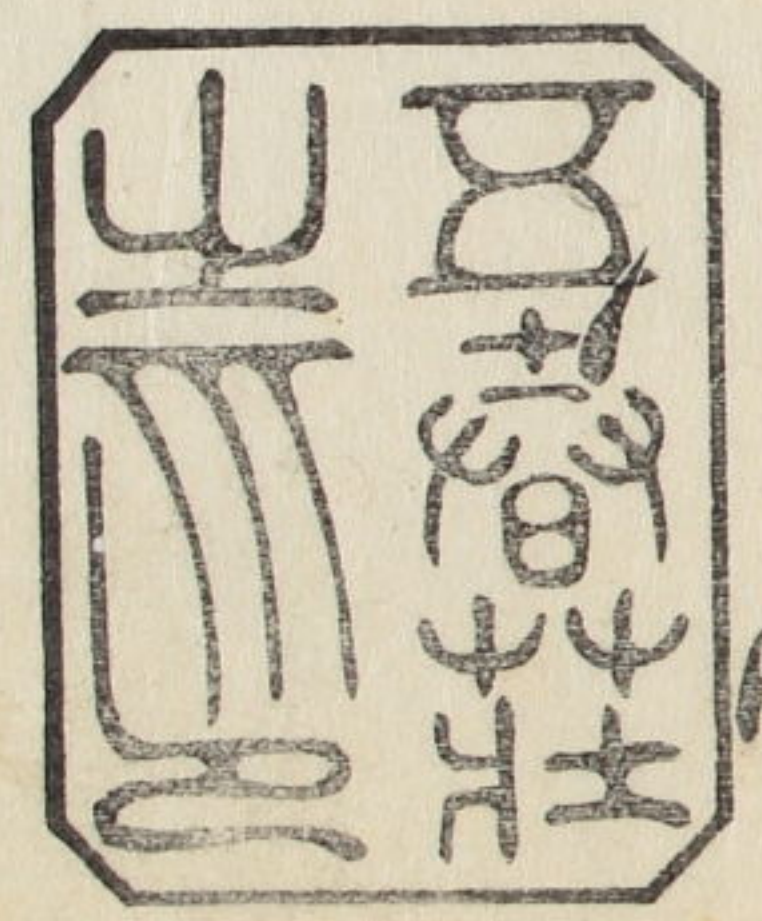
蒲葎の葉を白たき爆弁火
 妻らしや庵の葉も掃きあて
 ながるる松のあし一花の記
 茂る草をわらうけなす櫻が
 降るの中をこゆる跡けり
 故郷の瓢のゆるるおぼしき
 橋の葉におつらまうて郭へ
 南天の葉をこゆるさの葉
 並畑の白の目もある卯月
 茂る牡丹をこゆる風のゆるる時
 清宵や聖の料理の畑を
 残月やけさ木槿をこゆる時

浪のきつる舟遊樂のあはれは
 芥川とわたりてて夢の海
 初葉のついで月入風の通り
 雨の夜一日かゝりて目覚まの
 いはれの林のぬきかたは
 かたがたおぼしきこゝに
 みまはる梅の木さくらあけ
 冬の月を大空にうつらうつら

白屋より因傍所 本屋ナリ

井眉菴 岡 井湄

井白菴



井眉菴点譜



青
廿、



朱
十五、



白
十三、



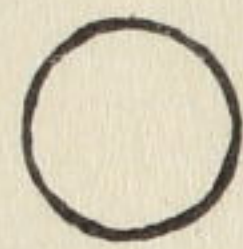
青
十、



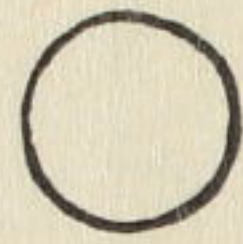
白
八、



白
六、



朱
二、



青
一点

右井眉菴家印也

茲於二月見之於戸口
赤とらり先帝をあらけの
編妻やひらきかひる林の
清閑の水着らんとのり

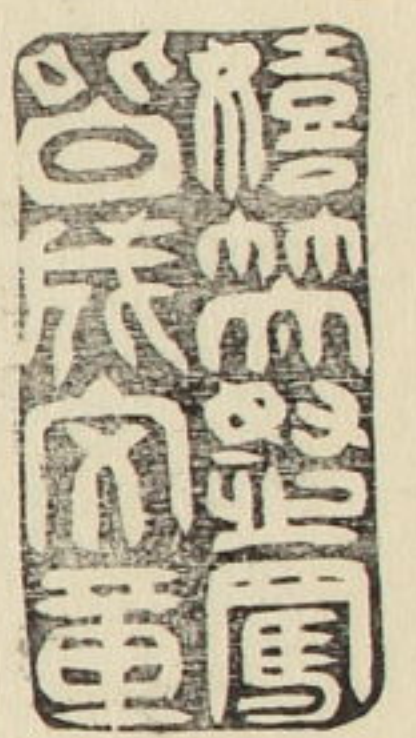
井眉菴高判

善水や釣瓶の中は雲古記
長玉の日はおきやる様
喜のや福活の自しよ喜物
世の柳お敷きつゝ世は
水は多樹の名もよきと
纏おある時よ川世は
なみの鶴柳の木の木は
夜の月更ぬるは名は
夜の月松の林も名は
山は紫の流るを焚く
秋はや鳴ぬ子をば
古の世は

橋はかくもやはる色は
や世は竹のよき名は
雨の月更ぬるは名は
かしの花は
山は入る名は
山は入る名は
世の月お持替は
新のや世は

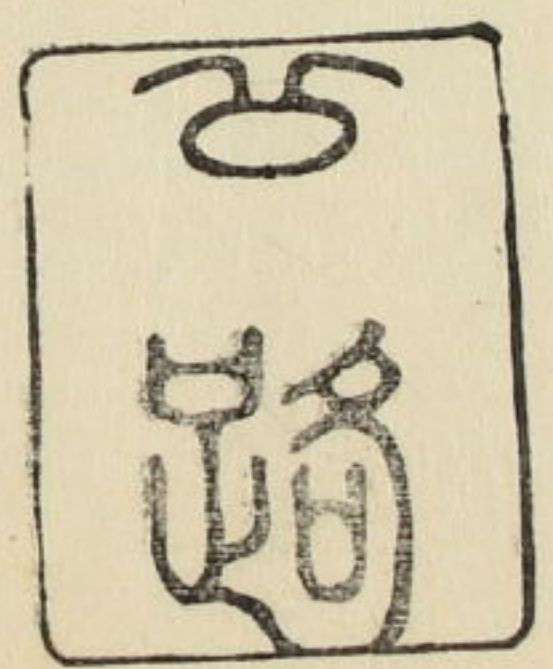
水久保町下目小久保

馬田江 藤本公路



中屋久

馬田江



救世樹よりて愛の在りぬ
梅子や人おらじも信長がけ
早啼や妻をたてし灯を並
杖はたひくし子もおぼしなく

右馬田江公路白

馬田江魚譜

玕 朱 一、

○ 青 五、

⊖ 青 十、

⊖ 朱 十五、

⊖ 青 廿五、

⊖ 朱 卅、

⊖ 青 空、

收 朱



⊖ 青

⊖ 朱 百、

一 朱



⊖ 青

⊖ 朱 百五、

⊖ 朱

⊖ 青

二百、

馬田江高判

梅子に淋しきもの川く衛八
菜のちとおの便りも此のま
る宿りしと見えたるや善橋
月足しぬおの便りも此のま
米搥の揚ぐまきあり友柳
船の川の感も人好居る百
あつまる戸口のわやうの月
片登り山つたなく梅もあら
苔思ふや妹の戸張の山乾き
立鴨のき返けり樹の葉も
藤の葉も梅の近つづく
船の舟の目もいふまに菜畑に

月の光もまておのりひ友柳
梅の本にせきりて赤い葉も秋
怪しきもの、東雲のわらひを立梅
あつたつたつてまの梅も
おのりも年木も船の舟も
餅の海や松の小雪のゆきも
まきもやも地もゆるる船も
桃もやもおのりもまのりも

上人所

東離園

中村照女

考

東離園

東離園

東離園

中村照女

留るよふの花と人好まぬは
岸の穂とるよふわらわ
史月の三月改り老りけり
春の穂とるよふ二十日
右 東離園 中村照女

東籬園点譜



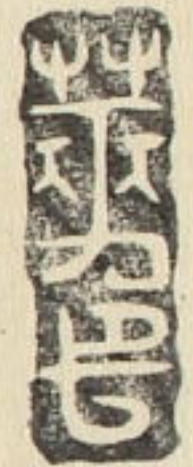
日 廿五



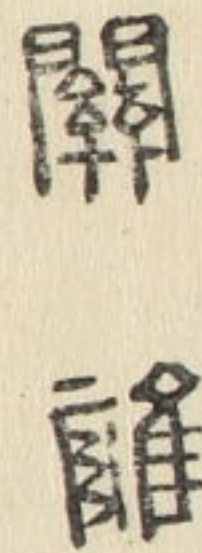
朱 十八



青 八



日 十三



日 十六



日 十七



日 三



朱 一点

東籬園高判

晴らうと鈴くむ猫の夢の
 春風もふ吹くわが懐は
 起るにふ草拵を是よりけり
 松高の雲のくくはなりけり
 遠隔るわが聲のくくはなりけり
 ひかへて二月廿の牡丹は
 萩高の月十日はあ鶴の枝
 高はくくはくくはくくはくくは
 二杯めは清あよりのや松の枝
 秋の蝶おたきひき出のわが
 物高のくくはくくはくくはくくは
 晴らうと鈴くむ猫の夢の

眉不^レ_レ三日月か^レ其^レ家^レ
 義^レ中^レの^レ事^レを^レあ^レら^レし^レ
 業^レ合^レせ^レら^レし^レも^レあ^レら^レし^レて^レ
 くら^レも^レあ^レら^レし^レか^レも^レあ^レら^レし^レ
 三日月の^レ放^レ世^レ切^レき^レか^レあ^レら^レし^レ
 飯^レ汁^レか^レあ^レら^レし^レの^レ字^レ果^レは^レあ^レら^レし^レ
 辨^レ叩^レく^レあ^レら^レし^レて^レあ^レら^レし^レ
 我^レの^レ事^レの^レ事^レを^レあ^レら^レし^レて^レあ^レら^レし^レ

堂^レの^レ事^レを^レあ^レら^レし^レて^レあ^レら^レし^レ

蘆^レ陰^レ舎 田^レ邊^レ百^レ堂

判^レ者

女^レ徳^レ陰^レ舎



持^レ群

華^レ一^レ實



譜点舎陰芦

龜

朱
十七、



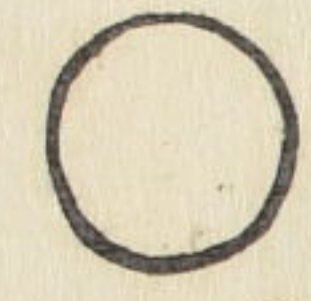
日
十五、



日
十六、

糸

青
十一、



日
七、



朱
五、

心

朱
三、



朱
二十、



朱
廿五、



朱
三十、



朱
三十一、



青
加印
六、

右 芦陰舎宗通

好判者癖
 言多古たをその心動らざる是
 心一時はたし不好者強神する守
 静 神符 意のり 色者
 鶴 龜 本管 陸奥宗宗
 近世了承如風韻あり

孫て待てらるの果報とて書
 へいし時敵打こゑ鶴の母り
 青草野一月やせはくく木は燈
 心草野のりてふ子も好判。安

上野新築所
翁堂

微雨夜来



授業

翁堂

之印



いそはわが棹の常と妻は水
長ふと男はねがはれ精川
秋の月と骨心の庭と照系
唐土の事と尾と姑夕しん

右翁堂字通句

此唐土の事
と女は翁は翁と翁と翁の
人たにおしんことまはる

翁堂魚譜



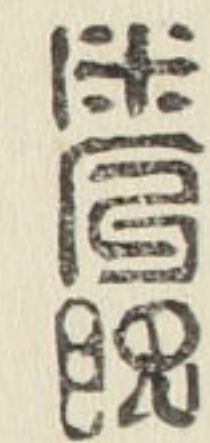
青
十五、



朱
十三、



青
十、



朱
八、



青
六、



朱
四、



青
二、



朱
一、

加印



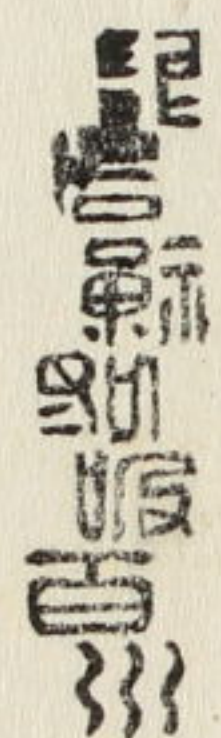
朱
一、



青
二、



朱
廿五、



青
二十、

判 高 堂 菊

親を子に母を父のやまを
親を母と父とを子とて
喜の極やんこも花をかつ
廣くは秋と秋とて田草
幸無や子と母無く又月
六月と秋と見ると廣く
秋の風月の喜無と秋
人の心は秋と秋とて
秋の夢我老とて人烟
嘆もまゝの秋と秋と
白雪の心や何処の雪
大雪は春物や月姑火

本所梅老後う小梅有輝

反古菴

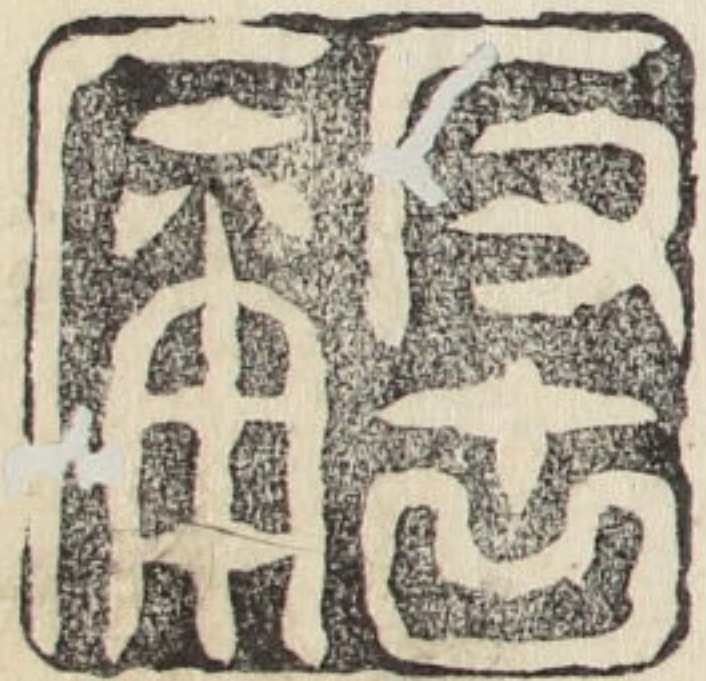
牧岡天来

花と秋のや松夢陳人



反古菴

反古菴



反古菴点譜

事の志回の事いぢりく様可花
六月也見覚の侍く末の事
廻板了裡草拵台分兼枝花
辨り爲る事上担守せり記

右反古菴家通也

好物判者癖
松寂持草拵戸一箇一箇一西一宗
草拵持草拵生垣新様瑞菱
人名徳侘天犬義人形舟搦
浦定下草拵拵事いぢりく事いぢりく
さうさう源氏つさく草拵拵事いぢりく物理也
さうさう草拵拵事いぢりく草拵拵事いぢりく
此草拵拵事いぢりく草拵拵事いぢりく
在下同草拵拵事いぢりく草拵拵事いぢりく



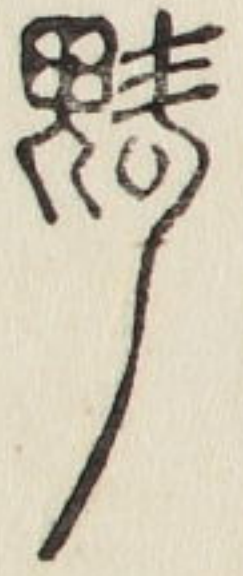
引三
点



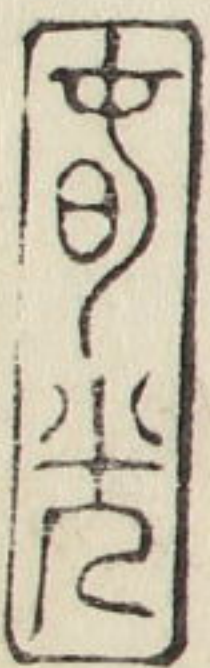
日五、



朱七、



日十、



青十二、

判 高 卷 古 反

え白や硯のうらみに草は秋
 葉やふのめお手いふの中
 缸寺て秋の心入とがさあや
 聖の杉や田植の人か推ふ
 河豚汁や巻坂山とつ葉いふ
 空北あて戸ささるるは幸旅
 風は中や浪無津浦暮山
 露月ハ大草は月そ嫁と君
 又月面や森さるる月とるる心
 雪冷こ出てうら強くさるる力
 ありきの目や摺子も現るる
 秋の杖さるる葉所の縁の人

羅江山

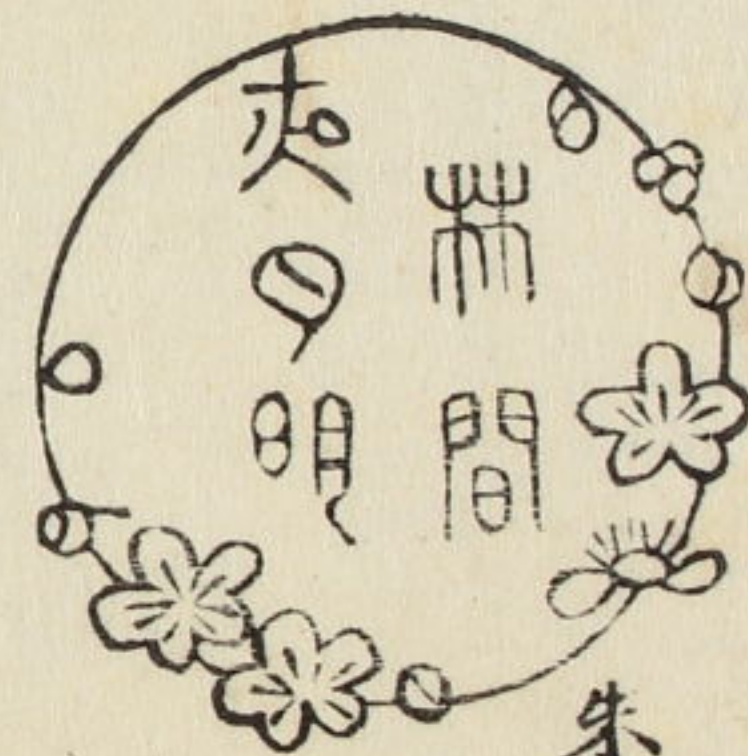
青十五

故道三石

朱十六

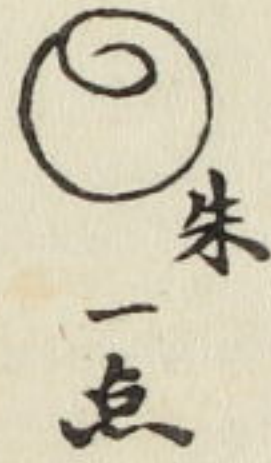
天引二十

青



朱二十

加印



朱

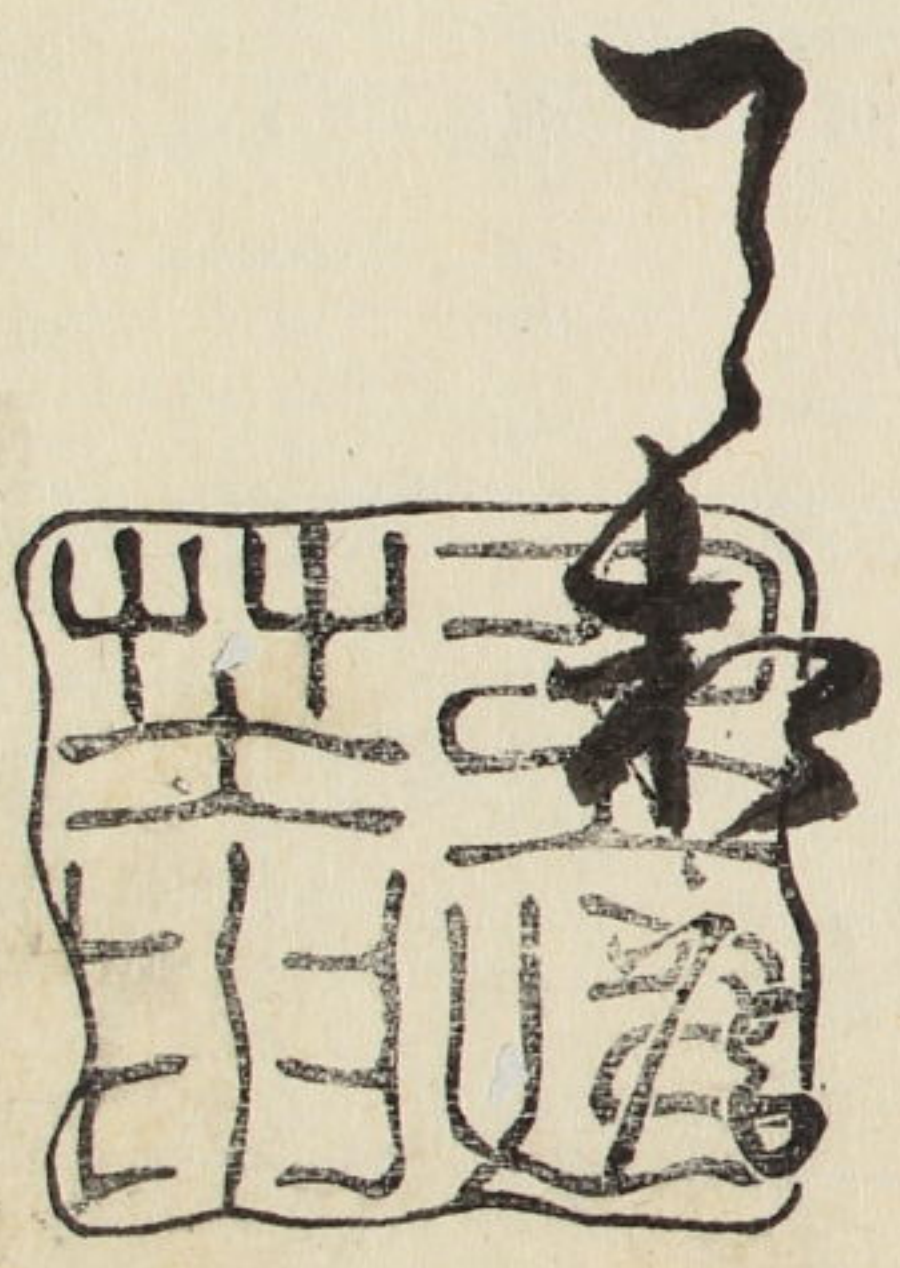


二

隔をりし垣をわたりて
 三方は松や杉居と三度滞り
 我ん流るる流るる水も
 松竹更なるまは酒刺り
 響頭やささけし音も
 幸水鶏啼やや日暮の
 鳥のかげま木の枝の
 花の鈴聲人の眠る
 松風や子やるる流るる
 水流や音もしるる
 山吹の香もふかき
 猿も眠るる

月夜菴 稻津杜杖

東



月夜菴点譜



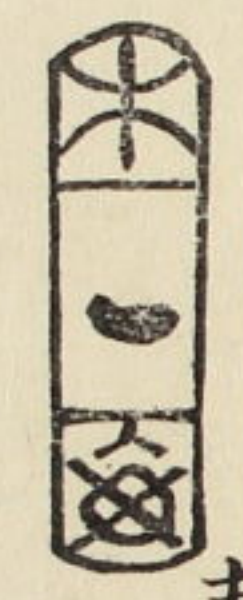
青
二十一、



朱
十五、



青
十三、

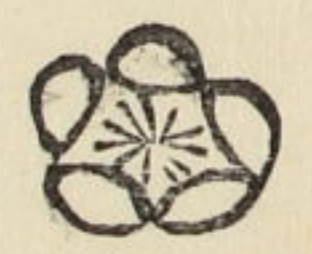


青
八、

朱
十、



青
四、



青
六、



朱
一点



朱
二、

きけりてふもあまのしほ柳か
 柳かふもあまのしほの葉
 月よあまのしほの葉か
 柳かあまのしほの葉か
 右月夜菴の点譜也

野茶 朱 廿五、

菅白 青 三十、

御津 朱 五十、



月夜菴高判

花と待こりむほは待こり
あまのこころを待こりむほは
赤坂のまゝにや海神の舟中
さかやかにあまのこころを待こりむほは
松の舟灯のまゝにや海神の舟中
形代やまゝにや海神の舟中
涼のまゝにや海神の舟中
夕顔や草外かゝるまゝにや
縁のまゝにや海神の舟中
身にまゝにや海神の舟中
大頭を待こりむほは待こり
月見つゝ海神の舟中

風や古きと見えし春の物
冬も春も打よる一向の露の口
昔久き物もなほ春とぬ冬の色
襟もかへぬ林のあり敷
まわりや春の世も今もけ一物
ひる月も春の空も一併の打
思ひの大きや打かん春の物
春の物も春もあつるさうさう
月涼しき春もあつるさうさう
物も春の物もあつるさうさう
春の物も春もあつるさうさう
目も春もあつるさうさう

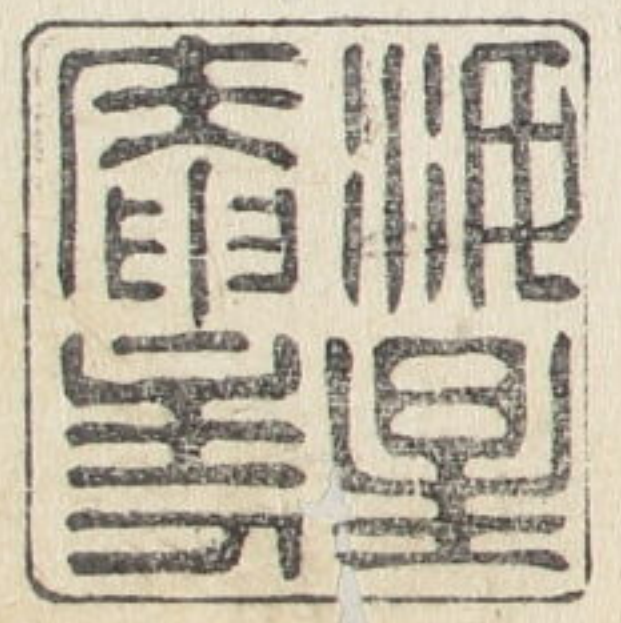
天酒綿屋所

汝星菴

岡本亀貫

子所

山生年表



汝星菴京語



朱
一点



日
三、



日
五、



青
七、



朱
十、

正月より正月院より正月
あけおし正月の正月
八月や正月の正月
梅子の正月の正月

右汝星菴京語

判者好物
松竹梅鯛鶴あり
まゝくはまゝに作る物多し

判 高 菴 星 汝

えりや鶴と志しくふるは
 大坂は瑞々しくわく梅長者
 二二多結まきつら粉うり
 穀入や隣り又官如槐柳
 詠わらふも如林田は植の哉
 撰抄く鶴とふ集り家如小菜
 たつゆま言て巻ふては代り
 常のねいひまらして梅連けり
 かしらんき月より地草のお
 行ふ船の出よくまきつら
 時ありふまらう一山の如きあり
 隣りと集り家如書はつら

朱

青
十三

朱

朱
十五

青

青
十六

朱



朱
二十一

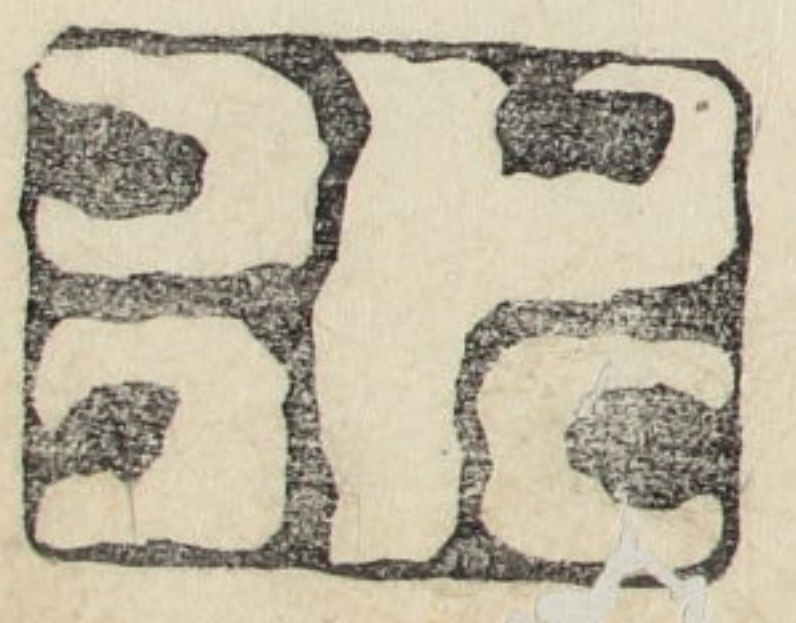
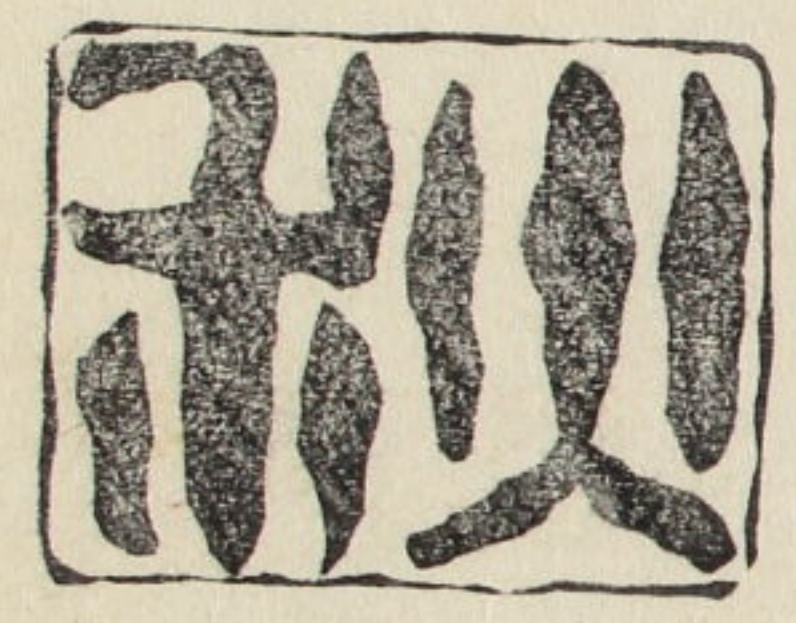
きまゝの「の」のまゝの甚くは
 めてはなかなたて備へて
 必まゝのな河豚の味のある
 夕まゝのふりんとせまゝの
 綱をさくまゝのまゝの
 部の色まゝのまゝの
 紙子もて出るや巨徳のありま

堀江のうらぬ橋の清い入西の

其日菴 村上秋水



其日菴



其日菴点譜

深井乃子規
四三三三

朱

廿五、

菴

青

二十、

菴

日

十五、

菴

朱

十、

菴

青

七、

菴

日

五、

菴

日

三、

菴

朱

一点

秋
從

菴乃多々如松魚あつと菴
 浅一菴故よりあつ松魚
 二菴六林のまゆりむと菴
 菴のまゆり松鴨の中は鴨

右二と白菴宗通句

其日菴高判

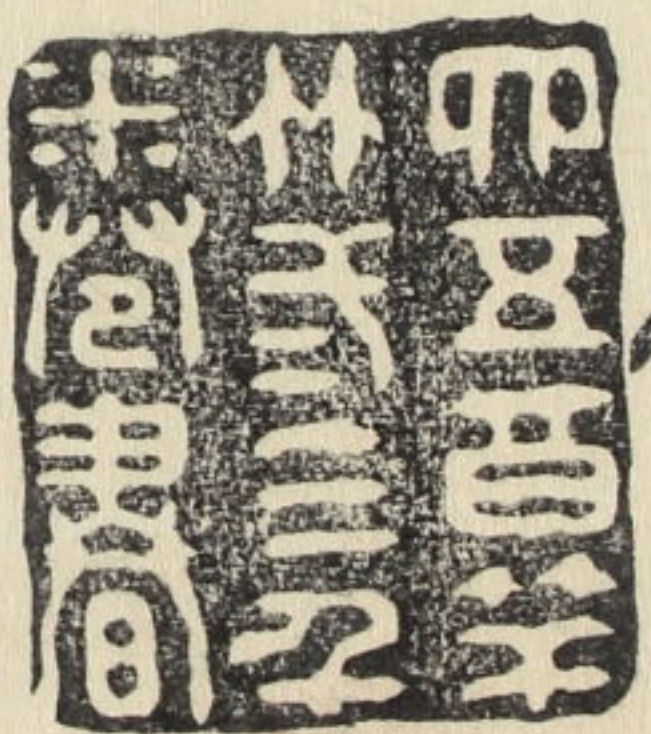
行雲其神もいづやまのふ
線本にそのいとおや藤月
今後るまゝと感つた様うれ
おとまの親のあつて浮葉か
布穀おつた外に草花の
叩くお鶴指をぬらんと終板
眼のまのかうり田あうれ
お涼と木枕さけてもいづり
と物うとつていふ日や林のそ
見事おきつてとさきさきおる
林草や又ある様と明もゆ
桐の花菴に竹とさきさきけり

白葉のかさつたあつて白いなり
さきさきおきさきさきけり
さきさきおきさきさきけり
初雪にぬけと傳きり坊おき
おやのまき本にさきさきけり
本がさきさきおきさきけり
おきさきおきさきさきけり
水あう月おきさきさきけり

尾崎翁後世入心名
梅塚金泉

刻
空
心
感
味
毎

梅
壺



えりやうはつしやの民の業
植て行田や大寺は是のま
うしるふかきふひて秋の月
木上加きくは世家る百神外れ

右 梅塚宗道印

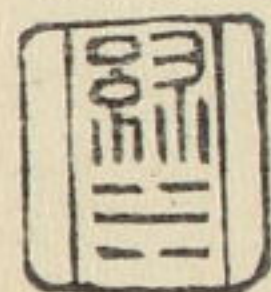
標 養 点 譜



朱
七
点



日
十、



日
十五、

此
天
里
五
里
田

青
廿
五、

天
里
五
里
田

朱
平、

天
里

天
刀
古
里
地
刀
古
里

日
六
十
五、

標
養

天
里
五
里
田

判 高 菴 栲

梅咲て人月日は若者うれ
梅の香と空にそはれ静と
立房の心知り一筆の山
掃くをく花の一筋と地をり
人夢に獲まはる夜さくらん
川筋の碧のそと柳のま
両方に寄つてくく一尺
筆の陰影の人の懐中一はと
短杖やいはしのや文に墨の
多くとく不作のまうそ花為
草振るやんはらんそ女郎を
もに出子と結者のまねはひ

文月や夢中一萩うら女郎は
人丸と赤人のあやて后の月
は殺す様のうちにはあやの月
掃まはれつるそとあやま
掃く後屋はそあやのあつそ
木かしの磨らるるそあやの月
まはるそあやのあやと海はあやのあ

乃係何法名篇

無為菴

中谷露海

云

無為菴



いんく好書賣見ゆ柳子

きんくさるし時こはるん

名月わたるは波のけりあけ

巨燈切る日はとくしる事ありて

右 雲乃庵家通句

判若好物

悟道 聖賢語 古言 俗中雅

徧名所 山家 文古


無為菴点譜

半片 青 一点

丸 青 二

 朱 三

 青 五

 朱 七

 青 十

 朱 二十

 青 三十

無為菴高判

白魚ハ只君代の〜
 皆多ハ又位六位〜
 位〜
 梅〜
 大洲の〜
 才〜
 菴〜
 角〜
 鶴〜
 納豆〜
 番貝〜
 法〜

義仲とてつらふ所をけり人
家のおもむきなる梅は春に
草部てつむつたりや踊の備
名月と裸田とや事一の山
石のたまり堅固と控へ扇うれ
あゝ雪の中もく鷹のこゝろ
重月やさしつるやね大直光
人幸といふて羨ましく親子は
湖の雪のくけみとさるにきり
水仙の水澄切るや世様の有
あうりや影は未描をうりく
傾城の物にうりく録うれ

大和橋筋布衣所西入角

八千房

津民一肖

空角傳承之下

空角傳承之下

空

空



八千房点譜



朱 二点



朱 七



日 十



日 十六



青

廿五



日

四



日

六十



朱



青 八十五

古く傳付の印文
見、く、く、の、かん
な、く、く、の、かん
く、く、の、かん

新井宗家集り書や大井川

郭云有、別後の書より

入月や海く、く、樹の姿

時、く、風、く、く、く、く、

右、く、宗家通句

判者好物

或、く、老、く、く、地名、魚

俗、く、難、く、く、く、く、く、

信、く、く、

極うす松のあゝやと山垣
老うらなまけり一まのまきと作
世之人も梅と酔る都うと
温白の町やふる提灯の意の人
流のまゝに流すや風の日は
山を磨きしるやう向ふ
茶少女のあゝんて這入るも
老の眼をまじり刺のまき
温白庚の流るつらと流る
う一切や寂がふる年こころ
落あつやうに故は世の
少うは松よ今春てかま

三十一

山を好まてかまむ日傘
家河原 草と梅葉は
吹くやうに空を渡る鳥
落船や柳は春を待つ
草の戸の長老は月夜
湖と戸はあゝく月夜
初葉の車に春の葉の
知事うらまはしるや
巨帷うらまはしるや
鴨あゝと流るは
春を好まてかまむ日傘
少うは松よ今春てかま

三十二

河段後橋筋標在河志念の度
清得舎 山脇呂國

第百回

別札

清得舎

清得舎

嘗や初書より一きりて今
くの花より母と見て言
何の事も白ひりて林の月
あつたやとて隙ある勢に

右清得舎家印白

三十一

富天翁傳來印譜
此印乃富天翁所傳之印也



朱 三点



朱 七



日 十



日 十五



青 廿五



日 四十



日 六十



日 八十五



琴之印無甲乙
可為卷主



青



朱



朱



青



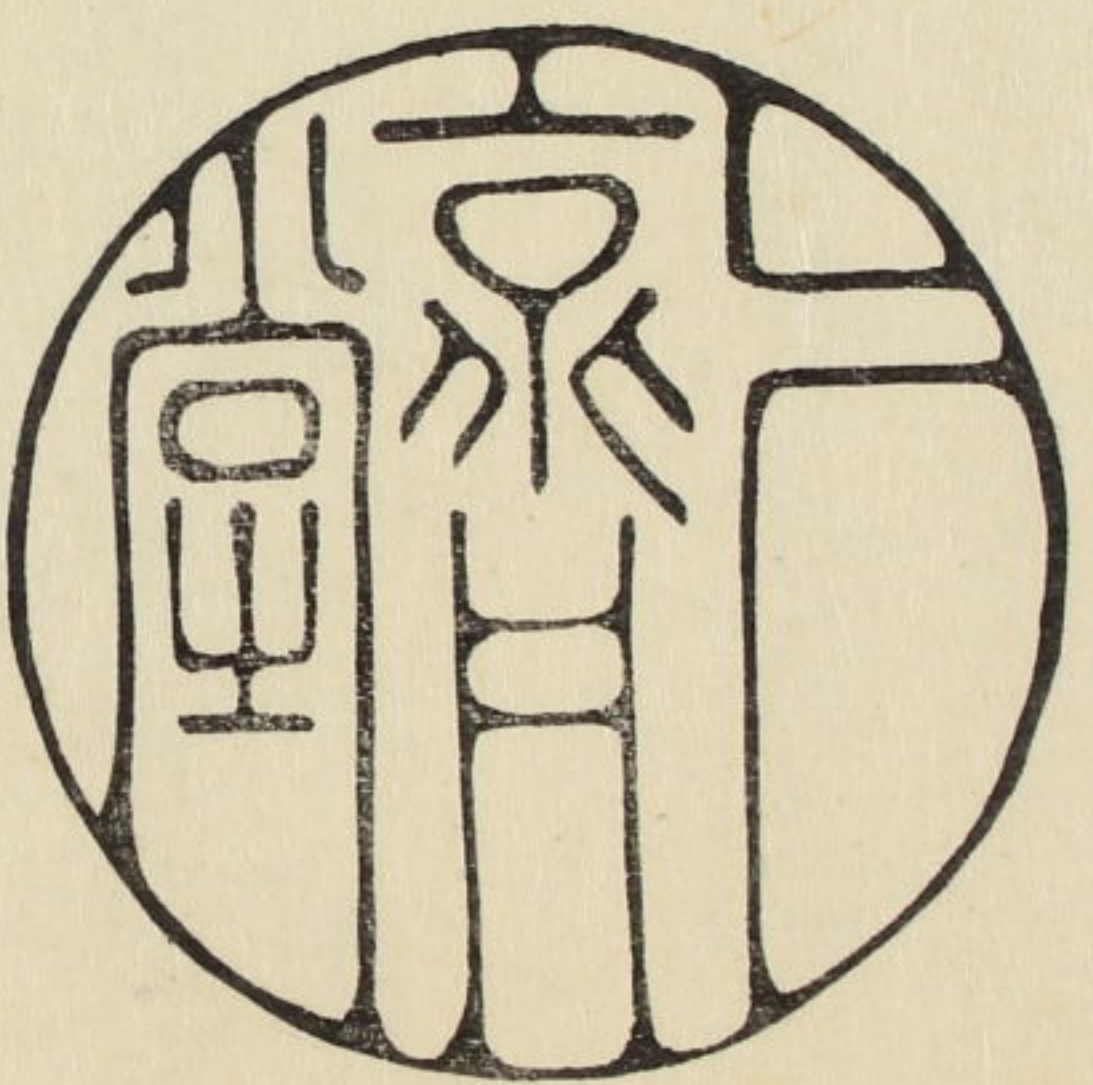
朱



青

天は内
二齋堂 小谷指葉

二の巻

世は春の福日かきりて三月菜
二日師く氷室好操りて糸
を多し知ぬ流里や三河
橋は葉や喜はたれく電海

右二葉書家函白

判者好抄きたるまゝ
白作やまゝは立一
好作は連芳風の仕まゝ

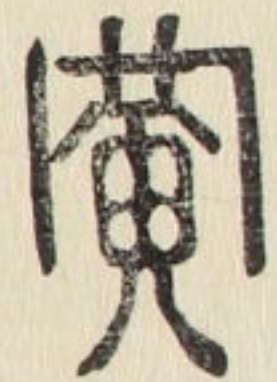
二 齋堂点譜



朱 一点



青 三、



朱 五、



青 七、



朱 十、



青 三十、



青 二十、

二 高堂判

梅さくら人さあさくら堂昔も
 白梅の色に替るる月白
 山吹の咲や流石を染む横
 若水と朝耳洗く人さ
 波の舟の名さうあじの山梅
 芽結梅う枝下りや紅梅
 竹の子を見せ六經ういねさ
 月のさくらとさくらとさくら
 さくらとさくらとさくらとさくら
 名月や雪の届くぬさくら
 さくらとさくらとさくらとさくら
 陽火に候はうさくらとさくら

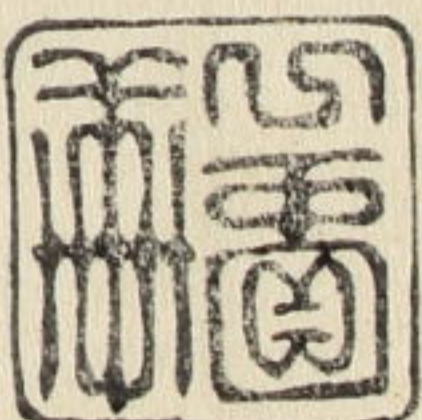
谷町法為可也
一囊軒

深海三籟



刺

一書軒



濁り世すまへは煙火
郭に浮世と遊て海けり
晴くまの泳りてはけり林の音
袖らひけり鶴の嘴と柳の

右一書軒宗匠印

一 囊軒点譜



一点



二、



三、



朱
半点



青
二、



朱
加印
一、



朱
七、



青
加印
一、

繼
谷
佳
刀

朱
日
一、

雲はくも白く川は清く
花はわび風は静し心は閑なる
秋月より雪も積るるは
かきつる如くはわびの心
我より水にあつてはわび
谷川も静なりわびの心
物よりわびの心はわび
行はたなきもわびの心
喜せぬはわびの心はわび
わびの心はわびの心はわび
わびの心はわびの心はわび
わびの心はわびの心はわび
わびの心はわびの心はわび

後反町中橋より

五彩堂

碩篇巻改号

端山式齋

あ

五彩堂



五彩堂点譜

し

二点

○

朱三、

し

青五、

し

朱七、

し

青十、

し

朱十五、

し

青三、

し

朱三、

五采五、琴

朱五十、

七、
標らるる、
名月、
初、
右、
判者、

判者好拍
は一、
な、
と、
松、

判 高 堂 彩 五

花のりさしや松の葉うららかに
香も色もあはれあつて天海の中
度つたにあらうて雲のふかき
とくもあつてあつてあつて
捨つて縁もあつてあつてあつて
行燈の光もあつてあつてあつて
涼の風もあつてあつてあつて
瀬の石もあつてあつてあつて
山もあつてあつてあつてあつて
空の月もあつてあつてあつて
松葉の上もあつてあつてあつて
灯もあつてあつてあつてあつて

名月あつてあつてあつてあつて
香もあつてあつてあつてあつて
度つたにあらうてあつてあつて
とくもあつてあつてあつてあつて
捨つて縁もあつてあつてあつて
行燈の光もあつてあつてあつて
涼の風もあつてあつてあつて
瀬の石もあつてあつてあつて
山もあつてあつてあつてあつて
空の月もあつてあつてあつて
松葉の上もあつてあつてあつて
灯もあつてあつてあつてあつて

花屋菴点譜

○ 朱 一点

○ 青 三、

青 六、

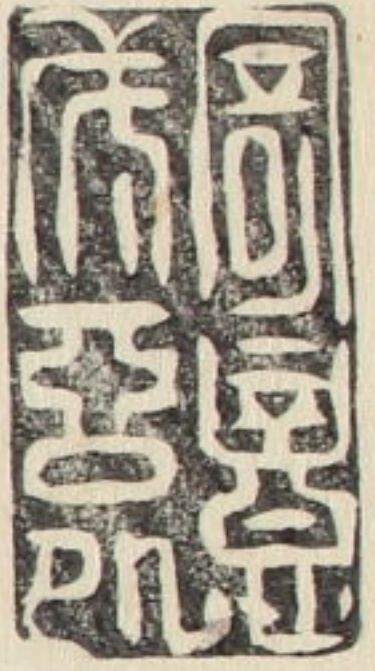
朱 八、

青 十、

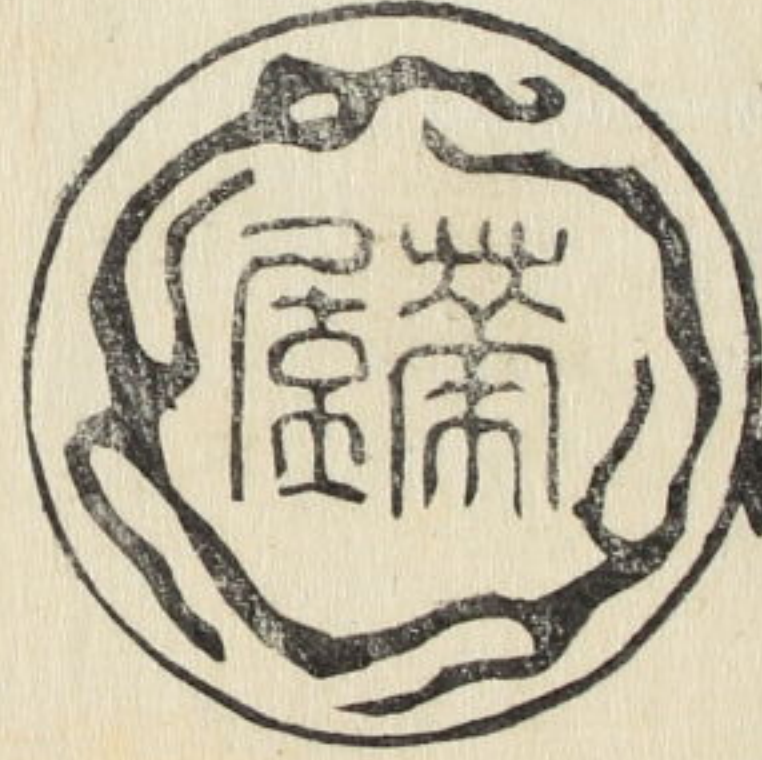
朱 十三、

自古之師何由來也

花屋菴 管 鼎左



花屋菴





青十五、

青

桃源舟



朱二十、

朱

桃源舟



青

廿五、



青

五十一、

魚下毎夜もあまのこまの西

ない管のあゆ見たり福の花

四窓は回れりまの秋の蝶

満きつゝ湖乃とと暮れ松八

右花屋唐京函句

判者好

白牡丹の春柳の小雨したはるあはく
うして折々激風はあやがきとあ
うらひ情の心裏に花をなぐりあまの
月と親きうらま月折は梅は白き
まよ竹を隔てて望みおとすへし程の
のまはれと才一とせしむる

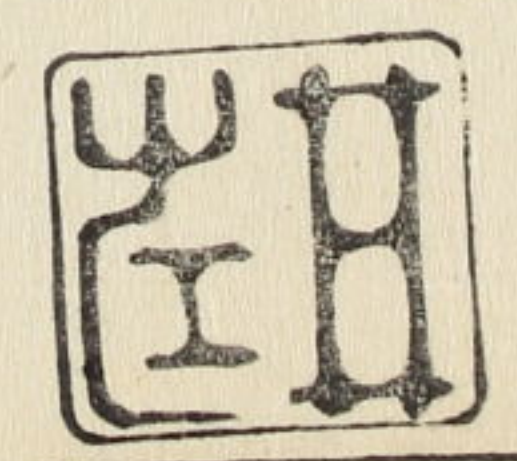
有坂江橋通幸格筋が西のくは寓居

芙蓉菴 浅野井左

浮舟

七年八月

南の巻



面を始 初子やめに経越やひ
郭よかきと藤の木のやまを
ゆるしたがる 藤のやまの系
冬は海つとて長き月相ハ

右芙蓉菴の巻白

判者好抄後編一出

卷

笑 蓉 菴 点 譜

花 朱 一点

多 青 二



青

三



朱

五



朱 八



青 十五



朱 二十

麻 多 菴 月 月

朱 十五

笑 蓉 菴 高 判

臨 如 系 強 入 き 海 や 月 月 月
 近 乃 予 語 付 々 々 々 々 々 々
 正 月 月 々 々 々 々 々 々 々 々
 立 子 名 名 々 々 々 々 々 々 々
 午 時 花 の 蔓 々 々 々 々 々 々
 夜 夜 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 行 枯 や 水 々 々 々 々 々 々 々
 石 拂 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 磯 石 々 々 針 の 月 々 々 々 々
 態 々 々 々 日 々 々 々 々 々 々 々
 引 繰 々 々 月 々 々 々 々 々 々 々
 祥 々 々 々 女 々 々 々 々 々 々 々

米平のついでに格好の想い
船の底とさうして船を初邦の
海へゆく程さうな心で
多に味教はるに買われし小舟
度より好まざるなり初さう

島内法水町中津下

九々菴 米齊五白
符彦改号

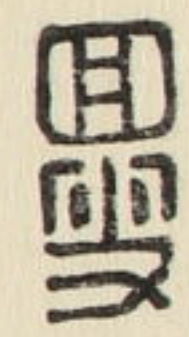
考

五白

九卷九章譜



青
三
点



日
五
、



朱
七
、



日
十
、



青
七
、

管
水
古
此
出
起

右
九
卷
九
章
譜

初はわくきりしつらわく
草の弱のうへに
さうり抄書一巻
肉くわく一日
白雪の庭掃切く
家おとす
雪掃く

上中河二丁目西角二軒あり

五葉亭

牧原其龍

撰

五葉亭

五葉亭

五葉亭高判

去風之極まはるる小葉
好みにあはるる高柳
桂のくちをみたりあはるる
瘦脆は姉よりけり葉は
花咲ぬ舟もいづる高柳
重なる葉のうはさし川
橋名は木よりあはるる
妙は坊のあはるる高柳
猪首の末なる競る高柳
名月をかたむけり高柳
一羽立時よせはるる高柳
夜瘦の後よりけり高柳

寺は花佛くまひとあはるる

春はなりとせめてあはるる高柳

年は流きたるよ月は生れり

雪は松雪うく白くはるる

右五葉亭高判

点譜

釣竿 朱

樂天来 日

波心一顆珠 日

月は明るるも夏は暑く
手は汗をかくも秋は涼し
霞は薄月を覆てあかきり
うららかな竹の露を枯草原
音とて大松清く月の入
風より吹きほろりゆくを
うきあふ外わらふる夕べ

○

五

布衣町大新くし筋

富雪菴

米澤公水

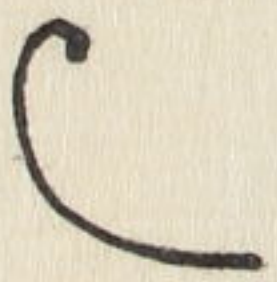
友史

二水



五

富雪巷点譜



今頃



まじく茶巾とりちう

五

我知の我不わきぬ花の志
 夕立わ人に草花はよといふ
 と物事あり秋よともあるうか
 鳴ららうかけ思ふもくくさうも

右富雪巷点譜

毎月能譜定日

六日 十六日 廿六日

淺生菴点譜

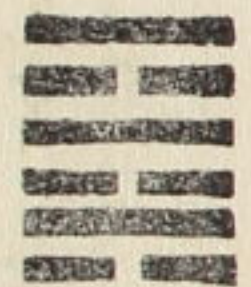


朱

十、



朱



青

八、



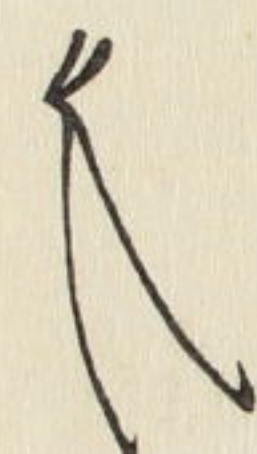
青

六、



朱青

五、



四

三、



青

一点



石松

石松

有之...町...
淺生菴 鈴木奇松
あ...号

譜点家九芦

全
一

如印
一

七、

早、

加印
一、

四、

三、

一、

控しつゝおほくもほくもほくも
海はとほくもほくもほくも
我もつゝおほくもほくもほくも
重なるもほくもほくもほくも

右芦九家宗匠句

染人ほ息杖くらんあけつ
若柳と控えかゝるわし
茂るさつゝおほくもほくもほくも
汐木焚てあつゝおほくもほくもほくも
石はつゝおほくもほくもほくも
幼果つゝおほくもほくもほくも
咲きつゝおほくもほくもほくも
むぎつゝおほくもほくもほくも
抱えつゝおほくもほくもほくも
短おわしつゝおほくもほくもほくも
物然やと物然やと物然や
月もつゝおほくもほくもほくも

鹿啼て梅の出ぬ葉をうけり
 地より木かけも月桂をい
 梅香にありと見くも伏草
 浮葉はたのむ風情や為氷
 眼よりる物やかたき言は
 言に似ぬそのまわりの海
 空より小燈のわじはらひ
 寐てまけ分と埋む河と流
 妻ぬや机と寝れおこす
 生るはた月と流る人杜の
 神つる川は流や女郎花
 みよはる花の行くところ
 夏かけのうら枝と歌火

不二菴桃慶上人可 後編出

子日菴草齊 同

泥中菴全曳 同

九夏菴六羽 同

皓々菴春大あはせと梅も若少西 同

有無菴貞祇 同

八朔坊夷柏 同

松風菴字舟 同

長松菴郭隣

上本所志下目
後編出

五井菴茶外

同

十南齋茶朝

同

俳諧堂可照

松屋町午町少南角
不二座三柳傳茶言此
了有文河未報下有

遲日菴仙年

小湊寺下町中橋下
後編出

一壽亭龜友

同

東籬亭菊翁

老松町三丁目南角
同

後叙

浪系筆遊記年近五季

杜邊門轉松競作可謂

盛唐之時也鳥故以那系

鳴去幾千家正何驥續

紹以乞拙話去亦不少然

為格調異而作亦不疑

正室於是乎松屋子作此

書便遊此語君處何家
之今調辯拙語之好辭
鳥鳴呼華能諧十近世之
謂華之角之時也其意此
舉而叙之是亦爾

又改本在戊子仲冬

松本奇松



校者

大野政里
常盤園九琴

編輯

松屋松生

